

作 川口幸宏

知的障害を持つ子どもたちの教育を切り開いた人の自立への旅



第6回

クラムシーは筏師の里



セガンが誕生した土地クラムシーが、セガンの人格形成にとってどれほどの意味があったのかは、十分に納得いくようにはお話しすることができま

せん。しかし、たしかにセガンは、自分の生育にとって何らかの意味があったことを思わせる記述をしているのです。前回のルソー流儀の自然の遊びは別です。トップ写真はこんなことを意識して撮影したクラムシーの現在です。真ん中に聳えるのが聖マルタン教会塔。その左手に立っているのは筏師の石像です。ベトレーム橋の欄干に据えられています。

さて、1875年の『教育に関する報告』の中で、セガンは「幼いころ、ニヴェルネ地方で、小麦やオート麦が7種類の柁で量られ、売られるのを見ていた」という経験の記述があります。はて、それはどこのことだろう？セガンが生まれたクラムシーはニヴェルネ地方に位置します。そして誕生時に届け出られた住所オ・パー・プティ＝マルシェ通り（小市・^{こいち}上通^{かみ}り）にT字に交わっている道がプティ＝マルシェ通りで、まさしくその道に麦の市（小市）が立ち、かつ、セガン家にぶつ

かっているのです。右写真がプティ＝マルシェ通りのかつての賑わい。写真右のアーケード下で市が開かれます。このアーケード市は現存します。写真中央に聖マルタン教会塔が見えますが、その下方、プチ＝マルシェ通りの突き当たりにセガン家をのぞき見ることができます。200年間変わらない光景です。



この回想からすると、セガンは、まったくクラムシーと無縁で育ったわけではないと言えましょう。何歳頃の経験というより、幼年期全般で時折見聞する光景だったのでしょね。

あと一つ、セガンは、非常に特徴的な文学的小品「筏師（^{いかだし}たち）」を1841年に発表しています。これは16世紀半ばから20世紀初頭にかけてのクラムシーの最大産業であった薪材の生産とパリへの搬出で、俗に「筏流^{フロタージュ}し」と呼ばれていますが、そのもっとも重要な役割を果たした職人をテーマとしたもので、筏流し産業に関する近年の掘り起こしと研究のための最重要資料としてセガンの作品が扱われています。たとえばクラムシー科学芸術協会が刊行した『筏師の日常生活』（ジャック・デュボン著）という研究書ではセガンの「筏師（たち）」の冒頭部の引用によって「まえがきに代えて」いるほどです。また、ロマン・ロラン『コラ・ブルニオン』の一節にある「名門の虚偽にまみれた墓碑銘が墓石とともに崩れ落ちようとも、クラムシーの筏師は口々に語り継がれる」を同書の扉の言葉としているのです。この事実を以てしても、「筏師」という職人の存在がいかに大きかったかを知ることができるでしょう。

セガンは、金銀財宝よりも大切で、これがなければパリそのものが寒さで凍え死んでしまう、という書き出しで「筏流

し」を次のように綴っています。セガンのものを捉える目の精緻さが示されます。全文集録は紙幅の関係で不可能ですが、情景描写に相当する写真・絵画資料を添えることにします。



「（パリを暖める）薪材はトラン^{トラン}連結車両（のよう）に形が整えられ、川の流れによってモルヴァンの森から届く（写真左）。このモルヴァン、この

トラン、この筏師^{フロタール}。疑いなく、最初はあなた方の耳に届くが、忘れられてしまう三つの言葉。あなた方が知らない産業、あなた方の幸せな生活にとって決して疲労を覚えさせない不思議な存在。」

「あらかじめ準備しておいた水門に伐採木を貯め込む。すべての伐採木がぎっしりと塊を作る。それからゆったりとした流れがその重い宝物を運ぶ。

どれだけ時間が掛かろうとも、流れはクラムシーに届く。そこで、薪材は鉤で川から引き出され、ヨンヌ川の兩岸に、



人一人通り抜ける隙間なく長く高く積み揃えられる。こうして並べられた薪材は、たいてい、クラムシー近辺のアルム村からブッソー村に至る川沿いに広がるこの帯状の地帯が好都合なのである。（写真左上）」



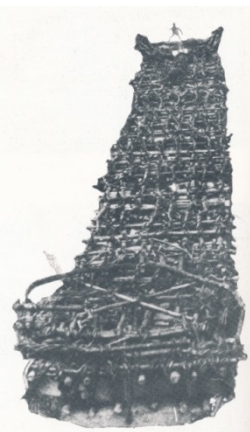
「3月の雨の頃川が増水しはじめると、周辺の地域から、多数の人々、その妻、その子どもたちを引き連れ川岸に大勢集まってくる。すべての人がごった返す（写真左下）。

たくましい若者が積み上げた薪材を揺さぶる。薪材は崩れる。



それから娘たちが一輪車を近づけ、子どもたちがそれに薪を積み込む。年寄りはその薪を集め 15 ピエ(約 32.5 センチ)の長い棒で支える。若者が杵(カードル)の中に薪を入れる。力強くハンマーで打ち込む(左イラスト)。これをブレーションシュと呼ぶ。4つのブレーションシュが四角に結び合わされ一つのクーボンを形作る。18

のクーボンが一つのトランとなる。これらの労働のすべてが川岸で遂げられ、どのブレーションシュも川に運び込まれた時、つまりすべてができあがって、ブレーションシュは、それぞれの間をルエ(直径1プス長さ15から20ピエ(1ピエ=約3センチ)の棒で、柳の枝のようにしなやかに曲がるように加工されている)で縛り付けられ、一番近くの運河水門が開けられた時にいつでも出発できるよう、トランを作る。(左の写真が薪材筏の完成品。どれだけ巨大であるかは船尾に立っている人影で推測できますでしょう。この人影は9歳から10歳の子どもだと記録されています。)

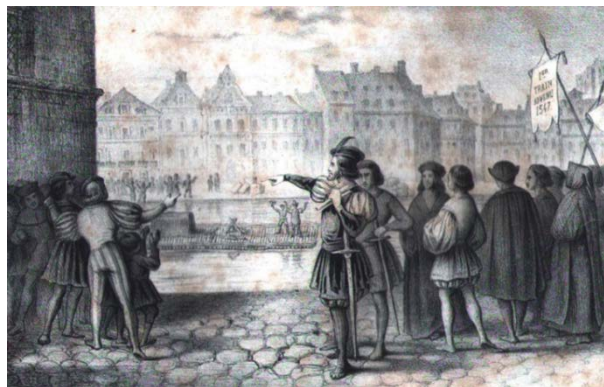


どのトランにも2人が乗り込む。助手は子どもである。働きぶりから借りて、ブート・ダルジュ(見張り番)の名がある。彼はトランの最後尾を操縦する。親方の筏師は先頭を務める。彼は突発的な出来事の場合にしか、その場を離れない。奔放な腕前で、彼は、船首で、向かい風をうけ、頭には何も被らず、髪を風にたなびかせ、腕を突き立てる。厚織りリンネル

のズボン、青いサージのベルト、赤いシャツ、大きな短靴が筏師の風習となっている衣装である。それでこそ、腕を絶えず動かし、脚をしっかりと固定させて、必要に応じて右に左に突き進む準備ができているのだ。」

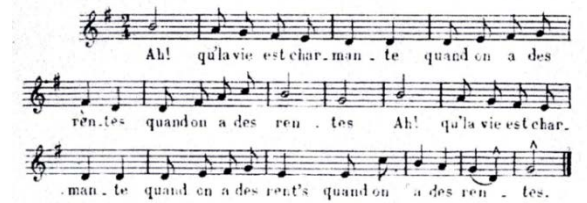
「トランは、進み、浮かび、その船体を長く伸ばし、蛇行し、急ぐ。これらの動きはすべて筏師によって跡が残され、あるいは戦われる。今、その船首が水に突っ込む。するとベルトまで筏師は引きずり込まれる。それから船首が起き上がる。そして、息切れしたように、トランは止まるのを望んでいるかのである。これは水の流れて推進されるこの長いマシンの間の果てしない戦いである。そして曲がったトランの機嫌をとる用心深い筏師は薪材のこの長いリボンの角を守る。それは川の厳しく狭く切り立った兩岸をうまくすり抜けるために他ならない。」

この薪材で作る筏流しという運行方法は、きちんと法によって位置づけられ、守られていました。法令名は「パリに供給するための、四角く、がっしりと、車輛連結のように結びあわされた薪材の筏」となっています。薪材筏は歴史が古く、下の図版がその第一号の瞬間を描いたもので、筏がセヌ川を下っています。向こう河岸ではパリ市民、セヌ川を流れる筏には二人の筏師、こちら岸では「トラン初お目見え、1547年」の幟旗を立てた出迎えの一行。喜びと歓迎の雰囲気は伝



わってくるではありませんか。

また、文化史的な観点から探してみますと、ポール・オリヴィアという人が俚謡から拾い集めた『仕事歌』(1910年)という本の中に「筏師の歌」が収載されています。筏師たちが、パリの薪材を必要とする階級を「ああ、なんてすてきな暮らしなんだ／遊んでやってけるなんて」と揶揄しているのです(下の譜面)。



あと一編は、シャンソンとして歌われた「筏師哀歌」というものがあります。1788年、マルセル・プリュドーム作詩作曲です。「クラムシーとパリを行ったり来たり／巨大な筏のご主人は／連結薪(train de bois)を操って／ブルジョアたちを暖める／川にクソ」一番はこういう風です。巻末参照。

また、筏師とその職能を支える地域の人たちは伝統産業を守り抜くために、幾度か、政治的な戦いをくりひろげています。大革命の時の度量衡改革に対しての大暴動、19世紀半ばに強大な力でもって進められた産業近代化施策に対する抵抗。アソシアシオンと呼ばれる結社方法でした。仲間に犠牲者が出たらその家族の生活を残った仲間たちが守り保障するという誓約をして、大闘争に立ち上がります。結果的にはナポレオン3世軍によって殲滅させられ、死刑、流刑を含む、大きな犠牲を出しました。

セガンが幼少期に筏流し産業と具体的な接触があったかどうかは不明ですが、筏流し産業が持ち込む文明・文化がクラムシーの習俗に大きなものがあったことを考えると、彼の精神形成とまったく無縁であったとは言い切れません。